

2010年度リプロダクティブ・ヘルスおよび公衆衛生に関する英国研修報告

大西真由美¹・大石 和代¹

保健学研究 23(2): 45-49, 2011

(2011年4月4日受付)
(2011年6月30日受理)

I. はじめに

長崎大学医学部保健学科看護学専攻に2009年度以降入学した学生に対し、国際看護学実習を選択科目として単位認定するにあたり、実習プログラムの整備を進めている¹⁾。2008年度から始めた英国におけるリプロダクティブ・ヘルスおよび公衆衛生活動に関する研修を¹、2010年度も実施したので報告する。尚、今回参加した3年生は、本研修参加が「国際看護学実習Ⅰ」の単位認定科目とならないため、本プログラムを「英国研修」と表記する。

II. 事前準備

2010年4月、新学期オリエンテーションにおいて、国際フィールド研修に関する計画案を提示し、その時点で参加希望を取ったところ、英国研修への参加希望者は1人であった。

2010年12月1日から1月14日まで、あらためてメーリングリストならびに掲示により、英国研修参加希望を取ったところ、看護学専攻3年生から3人(内、1人は助産師課程選択者)の希望があったため、具体的な計画を進めることとした。3人の参加希望者中、2人は海外渡航経験がなかったため、パスポート取得について助言

を行なった。

2008年度および2009年度に実施した英国研修内容を基に研修内容を調整した。これまで6泊7日(機中1泊)の日程で実施してきたが、2010年度は、学内行事等との調整の結果、2011年3月18日-23日の5泊6日(機中1泊)の日程となった。研修内容に関しては、2010年度に実施した英国研修内容を1日分短縮した形でロンドンならびにリーズでの現地引率者らと調整した。また、2010年度は、ナイチンゲール博物館が改修工事中であったため、見学できなかったが、今年度は改修された博物館を見学できるように調整した。

旅行社には、航空券、英国内列車移動(ロンドンからリーズ)、宿泊、空港と宿泊先の送迎車、リーズにおける専用車の手配を依頼した。

2011年2月23日に、事前オリエンテーションを実施した(表1)。この時に、参加希望学生に対し、英国研修参加にあたり学生本人と保護者宛の英国研修説明書と参加「承諾書」を配布し、「承諾書」に学生本人と保護者の署名・捺印の上、2011年3月10日までに提出することとした。参加学生は、事前に保健学科学務係で海外渡航申請手続きを行なうよう指導した。また、研修後に提出

表1. 事前オリエンテーション

- 1) 研修スケジュール、研修内容、英国滞在中の注意
- 2) 研修参加「承諾書」について
- 3) 研修中の安全管理(英国治安状況、海外安全情報、海外旅行保険加入含む)
- 4) 研修中の健康管理ならびに新型インフルエンザに関する対応
- 5) 事前学習内容(英国の歴史・文化・社会、National Health Servicesを含む保健医療システム、出産ケア、ジョン・スノウ、他)

【配布資料】

- ・日程表、研修内容、ホテルinformation、ホテル周辺地図、海外旅行保険加入申込書(加入は任意)
- ・長崎大学「国際交流(学生の海外派遣・留学生受入)に伴う危機管理対応マニュアル」
- ・保健学科「国際看護学実習等における事故・不測事態への対応」
- ・ロンドンにおいて日本人医師が診察を行なうクリニック一覧
- ・事前学習資料(英国の保健医療制度ならびに出産ケア、ジョン・スノウ)
- (1)近藤克則, 他. イギリスにおける医療の質評価の動向. JIM. 15 (3): 232-236, 2005.
- (2)平岡公一. イギリスの高齢者保健福祉サービスの動向-ブレア政権下での政策展開-. 保健の科学. 47 (8): 559-565, 2005.
- (3)白瀬由美香. イギリスにおける地域保健サービスの形成. 大原社会問題研究所雑誌. 586・587: 34-46, 2007.
- (4)小澤淳子. 英国における助産師のガイドライン. 助産師. 62 (1): 72-74, 2008.
- (5)小澤淳子. 特集: 世界の助産師からの学び-イギリスの助産技術の発達とそれを支えるもの-. 助産師. 62 (4): 20-23, 2008.
- (6)その他関係資料

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

活動報告

表2. 日本-英国移動スケジュール

日程	変更前	変更後
3月17日(木)		福岡泊
3月18日(金)	9:00 長崎空港発 → 10:35 羽田空港着 羽田空港 → (空港バス) → 成田空港 14:55 成田空港発 → 18:30アムステルダム (スキポール空港) 着 20:20 アムステルダム (スキポール) 発 → 20:50 ロンドン (ヒースロー) 着	7:10 福岡空港発 → 8:55 成田空港着 11:45 成田空港発 → (関西国際空港経由) 18:30 アムステルダム (スキポール空港) 着 20:20 アムステルダム (スキポール) 発 → 20:50 ロンドン (ヒースロー) 着
3月22日(火)	10:45 リーズ発 → 13:00 アムステルダム (スキポール空港) 着 14:00 アムステルダム (スキポール空港) 発 →	同左
3月23日(水)	9:10 関西国際空港着 関西国際空港 → (空港バス) → 伊丹空港 13:05 伊丹空港発 → 14:25 長崎空港着	同左

する課題レポートについて説明を行なった。

保護者からの承諾書には、研修参加にあたり、海外旅行保険に加入することを前提とする旨を記載し、学生は各自で任意の海外旅行保険に加入した。加入済であることを証明するコピーを提出してもらった。また、入学時に加入を勧奨している学生総合共済保険ならびに学生賠償責任保険等への加入状況についても確認した。

研修参加費用は、参加者の自己負担とした。研修参加費用に含まれるものは、航空券、宿泊費（朝食付）、ロンドン-リーズ列車乗車券・指定券、各空港と宿泊先間の送迎車両借上、リーズ市内移動用専用車両借上である。研修参加費用の他に、日本国内の移動、英国滞在中の朝食以外の食事、ロンドン市内の移動（地下鉄、バス）、博物館の入館料は、参加者の自己負担とした。通訳謝金

は、国際看護学実習担当教員が持つ適用可能な研究費から支払った。

研修直前の2011年3月11日に、東北地方太平洋沖地震が発生したため、羽田空港から成田空港への移動および成田空港からの出国の可否、ならびに研修実施そのものの可否について検討した結果、福岡空港から成田空港への空路移動に変更できたため、予定通り研修を実施することとした。表2に、変更前・変更後の移動スケジュールを示す。

Ⅲ. 研修の実際 (表3)

1. National Health Service (NHS)

英国在住日本人助産師から、NHSの最近の動向ならびにNHSによる出産ケアとプライベート病院等におけ

表3. 英国研修プログラム

日程		研修施設・場所	研修内容	現地引率者
3月19日(土)	午前	St. Mary's Hospital 見学 National Health Service (NHS) に関する講義	NHS の概要および最近の動向について理解を深めると共に、英国における出産ケア、リプロダクティブ・ヘルス・ケア、Vulnerable people へのアプローチについて、NHS の観点から学ぶ。	ドイレンド奈緒(助産師) 小澤淳子 (英国助産師)
	午後	ジョン・スノウの井戸見学 ナイチンゲール博物館見学	ジョン・スノウの公衆衛生学への貢献について学ぶ。 ナイチンゲールの功績と看護の発展について学ぶ。	
3月20日(日)	午前	自由行動	ロンドン文化視察	
	午後	リーズへ移動		
3月21日(月)	午前	Sue Ryder Care - Wheatfield Hospice 見学	英国におけるホスピス・ケア(訪問ホスピス含)について学ぶ。	座間智子 (保健師) Ikuko William (英国国教会牧師, チャプレン)
	午後	リーズ大学見学 Thackray 医療博物館見学	リーズ大学の歴史、教育・研究、図書館資料・史料等について学ぶ。 英国における公衆衛生、保健医療の発展の歴史を学ぶ。	

る出産ケアについてブリーフィングを受けた。

英国は、強い平等精神の下、すべての住民に対し、原則無料で、包括的保健医療サービスを税財源によって提供することを目的に、1948年にNHSを創設した。それ以降、NHSは様々な課題を抱えながらも、今日にいたるまで、国民の信頼と支持の下、継続されている。現在、NHSの財源の9割は国家一般財源から、1割は国民保険制度から拠出されている。参考までに、英国の消費税は20%である。英国においては、NHS病院は国営であり、NHSで働く約130万人のスタッフは公務員である。

英国では、救急医療を除き、基本的に、あらかじめ登録したGeneral Practitioner (GP) の診察を受け、必要に応じてGPが病院の専門医を紹介するシステムになっていることから、患者自身が受診したい医療機関を選択する自由が保障されていない。また、従来から紹介された医療機関で直ぐに医療を受けることが出来ないこともしばしばあり、場合によっては手術を受けるまでに1年以上待つ必要があるなど、入院待ち患者リストや手術待ち患者リストの長さについて問題視されてきた。近年、NHSに対する大規模な財源投入、医師をはじめ医療従事者の増員、民間企業や外国企業の活用による官民協働などにより、入院や手術を待つ患者リストは改善されてきている。しかしながら、経済危機の中で費用対効果を考慮した医療サービスの提供とその効率化、医療サービスの全国的な質の向上と担保、高齢者ケアの強化については、今後も引き続き課題となっている。

「産ませてもらおう」意識が強い英国在住の日本人女性のお産や出産ケアに関する姿勢・考え方と「自分が産む」意識が強いイギリス人の一般的な考え方の相違についても説明があり、学生も興味深く聞いていた。

2. St. Mary's Hospitalにおける出産ケア

英国で助産師免許を取得し、St. Mary's Hospitalにおいて助産師として勤務する日本人助産師から、St. Mary's Hospitalにおける出産ケアの最近の動向についてブリーフィングを受けた後、Labour ward (産科病棟) およびBirth centre (病院内助産院) を見学した。

英国では、マタニティ・ケアについては、妊産婦の希望を尊重しながら、1) GPと病院で必要に応じてマタニティ・ケアを分け合うShared care (協働)、2) 産科またはその他の合併症がある場合に進められる医師中心のFull hospital care、3) 自宅分娩も含め、妊娠期から分娩・産褥期まで全てのケアが助産師のみによって行われるMidwifery careのいずれかが選択される。

St. Mary's Hospitalのマタニティ・ユニットでは、1) ひとりひとりのニーズに合わせた女性を中心に考えたケアを安全かつ親しめる環境で提供する、2) 女性とその家族にとって最善の意思決定をサポートするため、助産師・医師が相互に協力するチームとして情報提供に努めることを理念として、年間4900件の分娩を取り扱っ

ている(2010年実績)。St. Mary's Hospitalで提供されるMidwifery careには、1) マンツーマンで訪問助産師が妊娠期から出産・産褥まで自宅でケアする自宅分娩ケア、2) 助産師による病院での妊婦ケア、出産ケアの後、訪問による自宅での産褥ケアを行なうHospital midwifery careがある。また、St. Mary's Hospitalには、合併症や既往症のない妊産婦を対象とし、医療介入のない落ち着いた環境整備を重視したBirth centreと、基本的に助産師のみで出産ケアを行なうが、必要に応じて産科医、麻酔科医、小児科医の介入も得るLabour wardがある。Birth centreでは、各個室で水中出産やお風呂の利用が可能であり、フリースタイルの出産が可能な環境が整えられている。Labour wardでは、共用ではあるが水中出産も可能になっている他、必要に応じて陣痛を和らげる方法として笑気ガス、硬膜外麻酔、無痛分娩等の適用も可能な設備が整っている。

出産後、経膈分娩の場合は1泊前後、帝王切開の場合には2泊前後で退院する。退院翌日から、必要に応じて、10～42日間、助産師が家庭訪問し、産褥ケアにあたる。

経済的貧困、移民、ドメスティック・バイオレンス、精神疾患等、社会的リスクを抱えた妊産婦に対するケアに関しては特に注意が払われており、そういった社会的に脆弱な条件下におかれた妊産婦を専門的にケアする助産師達もいる。

希望すれば、St. Mary's Hospitalでの実習も可能であるとのことであり、学生のモチベーションを刺激すると共に、今後、本学で助産師教育を修士課程において実施するにあたり、様々な条件下での出産ケア技術を獲得するための実習機会として活用できる可能性も示された。

3. Sue Ryder Care Wheatfields Hospiceにおけるホスピスケア

約30年前にホスピスが設立された頃は、末期がんの患者を対象とした心理的ケアならびに“平和な死”を迎えられるように支援することが主な機能であったが、1980年代頃から、がん以外の難病、腎疾患、認知症等の患者を対象にした終末期ケアも担うようになった。1年半前に、英国では認知症ケアのガイドラインが整備され、高齢者が増加したことにより急速にニーズが高まった認知症ケアの重要性に注目が集まっている。

施設内ホスピスとコミュニティ・ホスピス(訪問ホスピス)、デイ・ホスピス(通所ホスピス)の三つの機能を持つ。いずれも医師、看護師、保健師、理学療法士、作業療法士、カウンセラー、チャプレン等、チームでケアにあたる。ホスピス利用に際しては、基本的にGPから紹介されてくる。上記の三つのタイプのホスピスケアのどれを利用するかについては、病状や患者の希望によって使い分けられるシステムになっている。原則的に、GP、district nurse(地区保健師)、community manager(ホスピス専門看護師)らによる調整会議が開かれ、患

者の状況に適したケアを提供できるように調整されている。患者が自宅で終末期を迎える場合には、必要に応じて4回／日程度、district nurseが家庭訪問することもある。

ホスピス訪問にあたっては、ホスピス職員らから英語で説明があったが、教員も現地引率者も通訳せずに、必要に応じて解説するにとどめた。本研修参加にあたっては、事前に英語能力による参加制限をしたり、英語研修を行なうといったことはなかったが、学生らは概ね理解できたようであり、英語で質問する場面もみられた。

IV. 今後の課題

今年度の研修日程は、昨年度よりも更に1日短い日程となり、自由行動の時間をほとんど確保することができなかったが、学生達は、「もっと英国に滞在したい」気持ちと「そろそろ日本に帰りたい」気持ちが混在していたとのことで、研修内容や参加したことによって得られた経験については満足度が高かった。一方、学生から「ホスピス訪問の時間をもっと長く確保してほしい」「ホスピスのスタッフらとのディスカッションの時間をもっとほしい」といった意見もあり、ホスピスにつ

いて関心の高さがうかがえると共に、英語によるコミュニケーションの面白さや自信も実感できたようであった。

今回は、研修直前に、東日本で大地震・大津波、それに伴う原子力発電所の事故が発生し、研修実施の可否も検討したが、国内移動経路を調整し、できるだけリスク回避した形で実施することができた。学生達も一時は研修中止になることも覚悟していたが、無事に実施することができ、危機管理も含めて充実した経験を積むことができた。

グローバル社会で活躍できる人材を育成することを教育理念のひとつとして掲げている長崎大学としては、こういった国際的な経験を積むことができるプログラムを実施することは歓迎される半面、様々なリスクも伴うため、その都度最善の選択ができるように、リスク管理も含め、研修場所・時期・内容について検討していきたい。

文献

- 1) 大西真由美, 中尾理恵子, 川崎涼子, 大石和代. 平成21年度英国リプロダクティブ・ヘルスならびに地域保健研修報告. 保健学研究, 22 (2): 71-77, 2010.

Reproductive health and public health study tour in the UK

Mayumi ONISHI¹, Kazuyo OISHI¹

1 Department of Health Sciences, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

Received 4 April 2011

Accepted 30 June 2011